

2018年三位一体節第十一主日礼拝「共に立つ主イエス」
ルカ福音書 6:17～19

【聖書箇所】

17 イエスは彼らと一緒に山から下りて、平らな所にお立ちになった。大勢の弟子とおびたしい民衆が、ユダヤ全土とエルサレムから、また、ティルスやシドンの海岸地方から、18 イエスの教えを聞くため、また病気を癒していただくために来ていた。汚れた霊に悩まされていた人々もいやしていただいた。19 群衆は皆、何とかしてイエスに触れようとした。イエスから力が出て、すべての人の病気を癒していたからである。

1 公私混同

先月末から日本アマチュアボクシング連盟をめぐる騒動が、マスコミを賑わせています。人々の関心を惹きつけるのは、数々の不祥事で告発された連盟の元会長の非常に強烈な個性の故かもしれません。この騒動の根本には、元会長とその周辺の人々の「公私混同」があるように思います。彼は、「自分はアマチュアボクシングを愛している」と強調します。その言葉に嘘はないのでしょう。それなりの働きもしてきたのだと思います。しかし、「日本アマチュアボクシング連盟」は公的な機関。その公的な団体を、人の意見、特に自分に反対する人々の意見を聴く事もなく、自分勝手な思いだけで運営してしまった…そこに問題の根本があるように思います。そして、「公私混同」するのは、元会長だけではない。私たちは実によく「公私混同」してしまう。

さて「公私混同」の「公」というのは、限られた一部の人間だけではなく、多くのの人に関わりのあるもの…という意味です。この世界で最も多くの人に関わりのある事、言い換えれば、最も「公的なもの」とはいったい何なのでしょう？それは、何よりも、この世界を造られ命を造られ、私たちを生かす「神」の事でありましょう。そして、最も「私的」なものとは何か？それは神と一人一人との関係と言えるのではないのでしょうか。つまり、「信仰」です。この信仰は、神と一人一人の問題であり、余人が口を挟む事ができません。ですから、なんとも不可解な事に、最も公的な「神のこと」は、最も私的な一人一人の「信仰」によってしか理解できないし実現できません。そして、この最も私的な「信仰」を通じて最も公的な神の事が明らかになる所に、決定的にイエス・キリストが関わってきます。イエス・キリストこそ最も私的な方であると同時に、最も公的な方でもあります。今日はそんな公私を貫いて私たちを救いに導くイエス・キリストのあり方をご一緒に見ていこうと思います。

2 山の上

主イエスは今日の場面の前に、山に登られて夜を明かして祈られた…とルカは語ります。どの山か具体的な名前はわかりません。山は、神に近い場所、祈りの場所として聖書では描かれています。モーセを選び出し、奴隷として迫害されていたイスラエルの人々をエジプトの国を脱出させた聖書の神。神がモーセを通じて神の民イスラエルに十の戒めを授けたのもシナイ山でありました。山は人間の世界から離れて神の近くで祈りを捧げ、神と親しく交わる場所であったのです。主イエスはそこで夜を徹して祈られ、弟子の中から12人の使徒を選ばれました。新しい契約の民イスラエルを選ばれたのです。

イスラエルの民—アブラハムの子孫のことです。罪によって死の呪いに覆われた世界に信仰による命の祝福をもたらすために神が選ばれた者たちが、アブラハムの子孫であり、イスラエルの民でありました。しかし、そのアブラハムの子孫、イスラエルの代表であったファリサイ派や律法学者たちは、独善と自己正当化に走りました。神の名のもとに、自分たちのための体制を作り上げて、その体制を少しでも揺るがすような者の存在を排除するようになっていったのです。最も公なものである神の掟を曲解し、自分たちの為だけに用いる、自分たちが自由にできる所有物としてしまいました。ここに、公私混同の究極的な姿が見えます。

イエス様は彼らの過ちを指摘して、神のみ元へと立ち帰らせようとしていました。自分たちの正義に生きるのではなくて、神の正義に生きなさい…と仰った。しかし、律法学者やファリサイ派の人々はこれを拒みます。ある方は、こう言いました。「彼らは新しいぶどう酒である主イエスを受け入れることを拒否し、自分たちが新しい皮袋になることを拒絶した」と。そのとおりであります。その果てに、6:11にありますように「**彼らは怒り狂って、イエスを何とかしようと話し合った**」のです。つまり、主イエスを抹殺しようと思い始めたのです。

彼らの態度がはっきりした時、主イエスは祈るためにひとり山に登りました。そして、新しい神の民の「基」になるべき人々が誰であるのかを神様に問われたのでした。夜通しの祈りの果てに、夜が明けます。主イエスは、弟子たちを山の上に呼び集め、新しいイスラエル十二部族である十二使徒を立てました。その後、イエス様は彼らと共に山を下りてこられたのです。

3 平らな所に立つ

ルカはその様子を17節でこう語っています。「イエスは彼らと一緒に山から下りて、平らな所にお立ちになった」。ただ単に「降りてこられた」というのではなくて、「お立ちになった」。この“立つ”というギリシャ語は、当時の神々への礼拝について記した儀式的な文書に多く見られるそうです。横浜ナザレン教会のこの礼拝でも皆さん、賛美や主の祈り、信仰告白のときに、「差し支えなければお立ちください」という案内があります。この「立つ」というのは、何よりも

神のみ前に「立つ」事を意味します。「神のみ前に立ち、人の前に立つ」——
個の存在として、最も公のことに深く関わるという事を言っています。

4 イエスに聴く

「平らな所」とは、山の下です。神に近い、神と交わる“山の上”とは、全く異なる世界です。山の上にはいなかった「大勢の弟子」がおり、また「おびただしい民衆」がユダヤ全土、さらに異邦人の町である海岸地方のティルスやシドンからも集まって来ていました。何のために集まってきたのかと言えば、「イエスの教えを聞くため」であり、病を癒してもらい、汚れた霊による悩みを癒してもらうためです。18節の「イエスの教えを聞く」というのギリシャ語の原文には、「**教え**」という言葉はありません。直訳すれば、「**イエスに聞くために**」です。味わい深い表現だと思います。その内容が今日の箇所直後、20節以降で語られます。「あなたの敵を愛しなさい」という言葉で有名な主イエスのお話は、「平野の説教」と呼ばれています。しかし、この主イエスの「平野の説教」は、いわゆる「教え」だけではありません。確かに説教には「教え」という意味あいも含むものです。しかし、元来、説教とは、説教を語る説教者が祈りの内に耳を澄まし聴くことができた神の語りかけを、礼拝に集う会衆に告げることです。いわば、“神の言葉”の取次です。その中には、勿論様々な「教え」も含まれています。しかし、それだけではありません。神の語りかけには力があります。現実を変えていく力があります。奢り高ぶる者を打ち砕き、倒れている者を立たせ、死んでいる者を生き返らせる力です。一般的な「教え」には、そういうものはありません。ですから、主イエスにとって、「教え」は「癒し」という業と深く結びついているのです。主イエスのなさる「癒し」は、単なる病気の治療ではなく、私たち人間を根本的に造り替えてくださるものなのです。主イエスの「癒し」こそが、私たちを自分の死と永遠の命への復活へと至らせるのであります。

5 平らな所の現実

さて、おびただしい民衆が、イエス様に聞くために、癒してもらう集まっていた…とルカは語ります。面白い事に 17 節には「民衆」とあり、19 節には「群衆」とあります。ルカはこの二つを使い分けているようです。「民衆」と訳される言葉は、ルカ福音書の中では、基本的にイスラエルの民を示します。つまり神の約束の実現を待ち望む民の意味で使われているのです。一方「群衆」はもっと広い範疇の人々です。何であれ救いを求めている人々です。つまり、山の下、平らな所には救いを待ち望んでいる多くの人々がいます。その「群衆」の中には、既に父なる神を知っている「民衆」もいますし、さらにその「民衆」の中には主イエスに従おうとしている弟子たちもいる。山の下一平らな所、主イエスが新しい神の民の代表と共にお立ちになった「平らな所」には、

救いを待ち望んでいるおびたしい人々がいたのです。しかも、それらの人々は多様な人々でありました。それが、山の下の実態です。それは2000年たった今も変わりません。人の罪が生み出した混乱した世界、公私混同の世界。もう数十年前に、マザー・テレサが日本に来た時の言葉です。皆さんもご存知でしょう。彼女はこう言いました。「ここはインドに比べれば有り余るほどのパンがあります。しかし、この国の人々はパンよりも愛に飢え渴いていることを感じます」。また、彼女は「この世で最大の不幸は、戦争や貧困などではありません。人から見放され、『自分は誰からも必要とされていない』と感じる事なのです」とも常々語っていました。この彼女の言葉は、豊かな国・日本で、年間三万人以上の人々がいわゆる無縁死を迎える…というショッキングな現実に見えています。無縁死とは、亡くなった後に遺骨を引き受ける人が誰もいない、「見放された」境遇の方々です。一人の人の「死」、かけがえのない筈の一人の人が、この世界からいなくなる。しかし、その「命」が、周囲の人々になんの影響も与えない社会です。しかも、それは死ぬときだけではない。私たちの「生」もまた非常に「私的」なものになっているのです。ある新聞の調査ですが、社会人が最も恐れている事は、「何でも話すことが出来る相手がいらない孤独感」だったそうです。経済的な不安よりも、仕事がない不安よりも、心の思いを分かち合うことが出来ない境遇こそが、人を追い詰めるのです。年間二万人近い人々が自ら命を断っている現実も、それを裏づけます。人の命が極めて「私的」なものとなっている社会。「人の命」がやせ細って、「もの」と同じになっている。神の事を神の事とできない社会、公私混同の社会が行き着くのは、「人間の非人間化」なのかもしれません。ある方はこれを「命の飢饉」と呼びました。それが、私たちの生きる「平らな所」の実態であります。神の与えたもう「命」がまさに見いだせない世界です。戦争や災害で破壊された町であれ、一見豊かに栄えているような現代の都会であれ、人間社会の根底にある現実と同じではないかと思えます。

6 主イエスの癒し

この命の飢饉を象徴しているのが、聖書でいう「病」ではないでしょうか。イエス様の時代、病気は何らかの意味で罪と関連付けられていました。罪とは神様との関係の断絶であり、重い病は神にも見捨てられた結果だとか悪霊や汚れた霊にとり憑かれた結果だと考えられていました。つまり、病気は肉体の痛みだけでなく、経済的、社会的、宗教的な痛みをももたらすもの、二重三重の痛みを与え、人を死に至らせるもの。そんな痛み苦しみを抱えた人々が押し寄せて来たのです。「なんとかしてイエス様の姿を見、その言葉を聞き、その手に触れていただき、またイエス様に触れたい、そうすれば、きっと力を与えられて立ち上がれる、癒していただける。神様との交わりの中に再び迎え入れていただける。」「そうでなければ、自分はこのまま罪と死の闇の中に

沈んでいき滅んでしまうしかない」—主イエスは、そういう人々が大勢集まっている平地に下りていきます。そして、私たち人間が生み出した飢え乾きを御自身で引受け、私たちが失っていた「命」を与えてくださるのです。主イエスは、言葉と業を通じて、神の御心を語られます。「あなたは決して孤独に生き孤独に死んでいい存在ではない。あなたは父なる神を見失い自己中心的に生きている。それは神の御子を殺す生き方だ。だが、私はあなたのその“公私混同”を引き受ける。私を殺すあなたの為にこそ、命を捨てる。私が捨てた命によって、あなたは生きなさい、神に立ち返って生きなさい、神を求め続けて生きなさい」。だから、私たちはイエス様から、神の力強い私たちへの「肯定」を聴くのです。神が力強く私たち一人一人の存在を愛の内に受け入れ、認めてくださっている。その神の力強い愛を私たちは、主イエスを通じて知ります。それが、死と闇の真っ只中にいる私たち、命の飢饉の中にいる者達に命を与えるのです。それもこれも、私たちの場所に、主が12人の弟子達と共に立ちになった故であります。「あなたたちは滅んでよい筈がない」という神の御心に押し出されて主イエスが立ってくださったからです。神の愛が支配する「神の国」を打ち立てる為でありました。

7 愛のきずな

コロサイの信徒への手紙の中に、「愛は、すべてを完成させるきずなです」とあります。東日本大震災のとき、「絆」という言葉があちこちで言われるようになりました。それまで繁栄第一できた日本社会にはよい事だったと思います。ようやく「人は愛によって繋がっており、愛によって生きるもの」という事を人々が思うようになりました。しかし、私たちは、人々をつなぐ「絆」や「愛」を非常に私的なものと捉えているように思います。未だに「愛」が社会を構成する第一要件にはなっていません。それが平らな所、人間の国の現実です。

しかし、聖書が語る「神の国」は違います。この「愛」こそが第一の要件なのです。神の愛に生きる事こそ、神の国だからです。主イエスは、人間の国のただ中、人の力が支配している“公私混同”のただ中に、この神の国を実現する為に、平らな所へと立たれた…と言ってもよいかと思います。神の愛、イエス様の十字架の愛は、私たちをキリストにおいて一つに結びつけます。私たちは、主イエスに命の飢え乾きを癒していただいた者、自分が生かされてある意味を教えてもらった者達です。人間のきずなは人を縛り付ける面があります。拘束する面があります。しかし、キリストの十字架の愛は私たちを罪の縄目から自由にします。自分がキリストに愛されたように、他者も愛するように…と教えられるからです。キリストは決して私たち一人一人を無視なさない。私たち一人一人を徹底的に尊重してください。御自身の命をかけてでも。不思議な事ですが、御自身の命を捨てるまでに私たちを尊重するキリストの十字架のもとでこそ、それほどの愛のもとでこそ、私たちは罪ある自分を投げ出す

事ができます。そうして私たちは、イエス・キリストという「絆」で結ばれた新しい命へと甦るのです。ですから、十字架と復活の主イエスを救い主と告白する者は、一人ではありません。皆、神の愛によってキリストに結ばれて一つの体の一部となります。イエス・キリストという一つの体の部分となるのです。その事を忘れない為に私たちは今から聖餐式に与るのです。

8 伝道

イエス・キリストこそすべての人間に関わる最も公な「人」であります。そして、このイエス・キリストの体の一部とされた私たちもまた「公な存在」です。私たちが意識しようがしまいが、それが神の国の現実なのです。私たちは、イエス様を通じて、多くの人の命、神のみ前での「命」に関わる存在とされるからです。それは、主イエスと共に平らな所へ立った弟子達と同じなのです。

だから、私たちはイエス・キリストの十字架と復活の福音を、「自分だけのもの」としてはいけません。「誰にも言わずに、伝えずに、自分達だけが救われればいい」というものでは決してないのです。最も公なお方ーイエス・キリストに癒して頂けれなければならないすべての人々に対して、イエス様の十字架と復活を宣べ伝える事は、最も公的な業です。それが私たちが神から託された公的なつとめです。

そしてこの最も公的なつとめは、「公的」であるが故に、「私的」な報いを求めない業でもあります。イエス様は私たちの世界のただ中で夥しい人々を癒されましたが、癒す相手からなんの見返りも求めてはおられませんでした。宣べ伝える相手であるこの世から見返りを求めた時点でそれはキリストに倣う業ではなくなります。だから、伝道の目的は、「人間共同体である“教会”の維持・発展」ではありません。自分たちの集まりである“教会”を維持・発展する為のものではないのです。そこに伝道の難しさがあり、危うさがある…と思います。

そのときに忘れてはならないのは、私たちの伝道のつとめに応えてくださるのは、この世ではなく、父なる神であるという事です。私たちに報いてくださるのは、「神」であるからこそ、私たちは最も的確な報いが与えられる事を確信できます。なぜなら、伝道は、私たちの力で行うのではなく、神が行ってくださる業だからです。私たちは、安心して、報いを求めずに、ただひたすらにイエス・キリストを宣べ伝えていく事ができます。神に祈り求めつつ、委ねられたつとめに励みたいと思います。

9 平和

主イエス・キリストを宣べ伝える事は、平和の君ー平和の王であるイエス・キリストを宣べ伝えることです。主イエスが、平和の君ー平和の王であるのは、イエス様が、御自身の敵である私たち人間を、御自身の命を捨てて救ってくだ

さったからです。そして「敵を憎まざるを得ない」という私たちの根本的に病んでいる部分―最も私的な部分を癒してくださいました。このお方を自分の救い主と受け入れる私たちは、平和の君・主イエスのお体の一部として、手足として、最も公的な事柄である「平和」を確立する者とされるのです。

8月15日―日本が連合軍に無条件降伏する事で全世界を巻き込んだ第二次世界大戦が終結した日です。夥しい犠牲が出た戦争でした。人間の罪の本性が剥き出しにされました。73年前、日本はあの戦いの敗戦を自分たちの国のあり方の根本とすることで平和を目指そうとしました。戦争放棄による平和を自分たちのあり方の根本とする事で命を得ようとしたのです。

しかし、日本の為政者達はいとも簡単にその決意を捨てました。国民の大半である戦後生まれの人間、特に平成生まれの若年者層にとって、太平洋戦争は、1400年前の「大化の改新」とさほど変わりがないような歴史上の出来事、自分たちとは殆ど関わりを持たない史実として受け止められています。昭和の間、維持されていた平和教育をあらゆる圧力によって放棄させた結果です。そんな日本の現実が最もよく現れているのが、戦後長く維持してきた「武器輸出三原則」の廃棄でしょう。現政権は、今、軍需産業に力をいれています。毎年成田で行われる武器展示会はどんどんとその規模を広げています。軍需産業が日本の産業構造の中に組み込まれることは、何より恐ろしい事です。世界のどこかで戦争が行われていないと、人殺しが行われていないと、生活できない人を作り出す事になるからです。工場で働く人々の手の業が、別の場所では人間の命を奪う事になるのです。「戦争を抑止する為の武器だ」と権力者は言います。しかし、現実にはそうして作られた武器は、世界のあちこちの地域で紛争に用いられています。いや、「抑止」のための武器があるからこそ、「紛争」が起こり、拡大する悲惨な現実があるのです。紛争で親しいもの、愛する者の命を失った人々の痛み、苦しみよりも、人の命よりも、自分たちの金と権力を優先する…これ以上の「公私混同」があるでしょうか。そして、その「公私混同」の末に、夥しい犠牲の上に制定された平和憲法さえも変えようとしています。

今こそ、平和の君、イエス・キリストを宣べ伝えるべきときです。今、述べ伝えなければ、宣べ伝えるときはありません。自分の敵である人間の為に十字架につけられたお方こそ、全く異なるものを一つに結ぶきずなであると。キリストは今も立ってくださっています。私たちが生きる「平らな所」で。宣べ伝えずにはおられません、イエス・キリストの一部として、力の限りに。平和の君を与えてくださった神に感謝します。